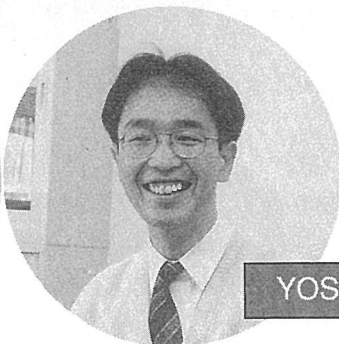


名人・達人 評判倶楽部 THE GREATEST PEOPLE

海水パンツいっちゃんの
身軽さと自然さが好きです

PROFILE

豊田能史
成和环境（株）代表取締役
当協会理事
出身／愛知県生まれ
血液型／AB型
信条／素直な心
夢／人間として成功すること
好きな言葉／青春とは心の若さである
嫌いなこと／必要以上に自分を飾って、背伸びをすること



YOSHIHITO TOYODA

スキューバダイビングの達人が愛産協にいるらしいという“噂”を耳にし、真相をつかむためにぜひインタビューを行いたい! というわけで実現した今回の「名人・達人 評判倶楽部」。

お話をうかがったお相手は、当協会理事を務める成和环境（株）の豊田社長。今回はどんな達人ぶりが聞けたでしょうか。花井さんのインタビューはいかに……。

学生時代は片道切符を握って海外へ潜りに

— 豊田さんは、このインタビューコーナー最年少のゲストですが、音に聞こえたスキューバダイビングの達人だそうですね。

豊田『いやあ、達人かどうかはわかりませんが…。これ、古くて恐縮なんですけど、ご覧ください。』

— あらあ、ダイビングの写真ですね! それにしてもたくさんありますねえ。これはどこなんですか? (現地の子供たちらしい何人かと砂浜で笑っている写真)。

豊田『インドネシアです。何回も行っていますが、好きなところのひとつです。』

— 海へ潜る、ということはいつ頃からのご趣味ですか?

豊田『学生の時にライセンスを取りまして、資格としてはアシスタントまで行きました。当時は、目指す場所の片道切符だけ握って飛んで行って、現地に来ている日本人にスキューバダイビングを教えるアルバイトをして。そうしてお金を稼ぎ、帰りの

航空券を買って帰ってくる。そんなことをよくしていました。』

— 実に身軽に、アクティブに楽しんでいらっしゃたんですねえ。

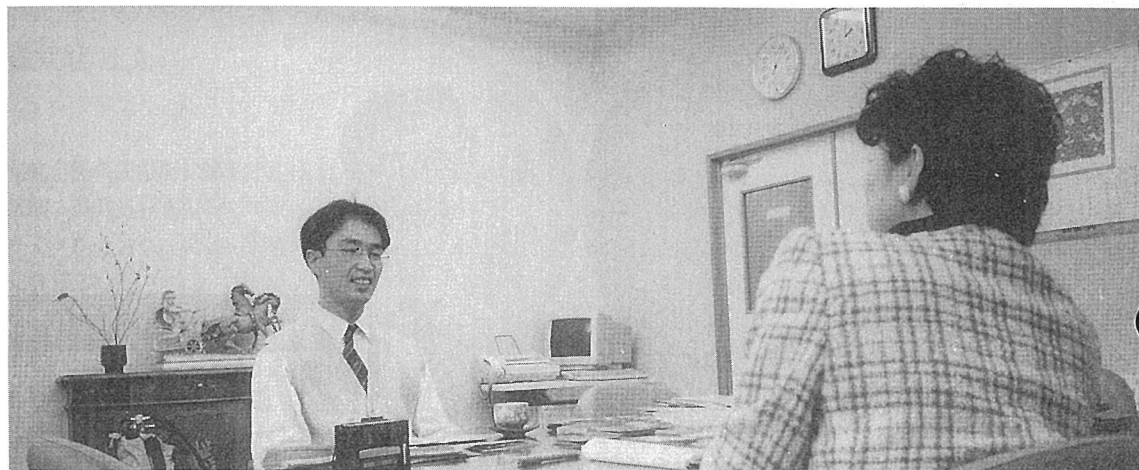
豊田『ホントはそういう仕事の方が、自分に合ってたような気がするんですけど (笑い)。』

— そうもいかず、今は社長業に取り組んでいらっしゃる。(一枚写真を取り上げ……) この豊田さんの横に仲睦まじく寄り添っていらっしゃる方は、もしかして?

豊田『そうです。女房です (笑)。これは結婚する前の写真ですが、女房は僕がダイビングを教えた生徒の中の一人だったんですよ。』

— そうすると、夫婦共通のご趣味があるわけで、二倍楽しいですね。





豊田『いや、もう今は全然できなくて…。今日は花井さんがいらっしゃるの、昔の写真を引っ張り出しました。僕自身も久しぶりに見たんですが、何かすごく懐かしい気がします。』

—じゃあ、この奥さんとのスナップが多いインドネシアの話などから伺いましょうか。

豊田『そうですね。インドネシアのいいところは、住んでいる人たちの人柄がとにかくすごくいいんです。小さな子供たちともすぐ仲良しになれるんですよ。僕が海に出て、一人していると、子供たちをはじめ村の人たちも出てくるんですね。ニコニコして。こうした現地の人たちとのふれあいというのは、大きな魅力でしたね。海へ潜るのも確かにおもしろいし、楽しいです。でもそれだけじゃなく、いろんな要素が組み合わさって一つの喜びになってる、そんな感覚といえいいんでしょうか。そういうものがあるんですよ。』

—この写真の人たちも、みんな笑顔が自然で実にいい表情ですね。インドネシアの海はキレイなんでしょうね。

豊田『インドネシアの海の全部がそうだとは言えませんが、この写真のムンジャガンというところは本当にキレイです。水深40メートルくらい潜っても、水面の舟から出している人の足が見えるくらいです

から。潜っていてもね、視界が広いですから、実にノビノビできます。

(たくさんの写真の山から一枚抜き取って) 魚がチョッカイをかけに来るんですよ。これはフグなんですけど、捕まえて抱いたら、怒ってこんなにふくれてしまったんです。』

—見事ですねえ。さすがインドネシア(笑)。

豊田『ハリセンボンなんか、もっとおもしろいですよ。捕まえて、スッと上にあげて水面に出してや



ると、水から出てふくれあがるものですから、空気をいっぱい吸っちゃう。そのまま水に戻してやっても、ふくれあがったまま自分でとじることができないものから、尻尾だけ出してパチャパチャやってるわけです。それがまた可愛くて笑ってしまいます。』

—この写真の山ひとつ見ましても、ダイビングに関しては歴戦のつわものという感じがしますが、そこまでのめり込ませた、そのきっかけは何だったんですか？

豊田『学生で東京にいた頃ですね、きっかけは。ある日、海水浴に行くことになったんですが、なにせ海がキタナイでしょ。水中メガネと足ヒレを買おうと思いお店に行ったわけです。そしたら。あとはお店の人の手練手管というか、「おもしろいですよお、やりませんかあ」みたいな感じで、アレヨアレヨ…です。』



—マリンスポーツは醍醐味も大きいと思いますが、危険も伴いますよね。そうした時のための勉強も必要ですね。

豊田『ライセンスを取るための講習の中にもあるんですが、まず、自分を助ける。セルフコントロールですね。それが完全にできるようになってから人を助けるトレーニングをするんです。』

—そういう場面に出くわしたことはありますか？

豊田『幸い、それはないですね。でも、溺れて亡くなった人の遺体を頼まれて捜しに行ったということがあります。海水浴場はダイビングポイントと違って波が高いので、一人や二人で捜索しても見つけにくいんです。』

—ちょっとつらいお手伝いですね。同じ潜るのも目的が違う。どうでしょう、ダイビングを始めて何か心のあり方が変わったとかいうことはありませんか？

豊田『そうですね。一番思うのは、地上にいて人間は平面でしか動けませんよね。ところが水の中

だと上下に動ける。何千メートルもあるような場所の、例えば水深20メートルくらいのところに、中性浮力と言うんですけども、止まっていることができるんです。そうした時の感覚がもたらすのかも知れませんが、世界観が変わったなというのはありますね。』

—先程、一人で片道切符だけ握って飛んでいっちゃうとおっしゃってましたが、一人での行動というのは、コミュニケーション能力というか、技術が必要になりますね。』

豊田『結局、人というのは、国が違ってても基本的には同じだと思います。海の中では会話ができません。ですから、目で会話したり、悲しい時には悲しい顔、嬉しい時には嬉しい顔をして相手に伝えようと努力します。しゃべらないコミュニケーションですね。すると陸に上がってから、ごく自然に、現地の人ともコミュニケーションが取れるんです。』

—それはすばらしいですね。私たち日本人はそういう表現の仕方が苦手ですから、外国の人というだけでつい構えてしまいますし。

豊田『この写真を見ていて思うんですが（インドネシアの浜辺での風景）、ここにブラッといますね。あれ、僕はどこかな、と思ったら現地の人たちと同じような感じで立っているんですよ。』



松下青年経営塾で自己革新

—これは見分けがつかない(笑)。すっかり溶け込んでますねえ。でも、どの写真も楽しそうで、最近では潜るヒマがないとのことですけど、社長業の忙しさが恨めしいんじゃないんですか。

豊田『そんなことはないんですけど(笑)。今、学会がけっこうあるんですよ。日本廃棄物学会とか、資源エネルギー学会ですとか。それと日本学士会というのがありまして、そこに入っているいろいろ勉強して、論文を書いてみようかな、と。』

—アカデミックな話題ですね。そういえば、豊田さんは最近山にこもられた、というお話も聞きましたが。

豊田『えっ!山ですか!?山にこもった記憶はないですよ。(ちょっと考え込んで)もしかして松下青年経営塾へ入ったことじゃないでしょうか。』

—どれくらいの期間入塾されていたりしゃったのですか。

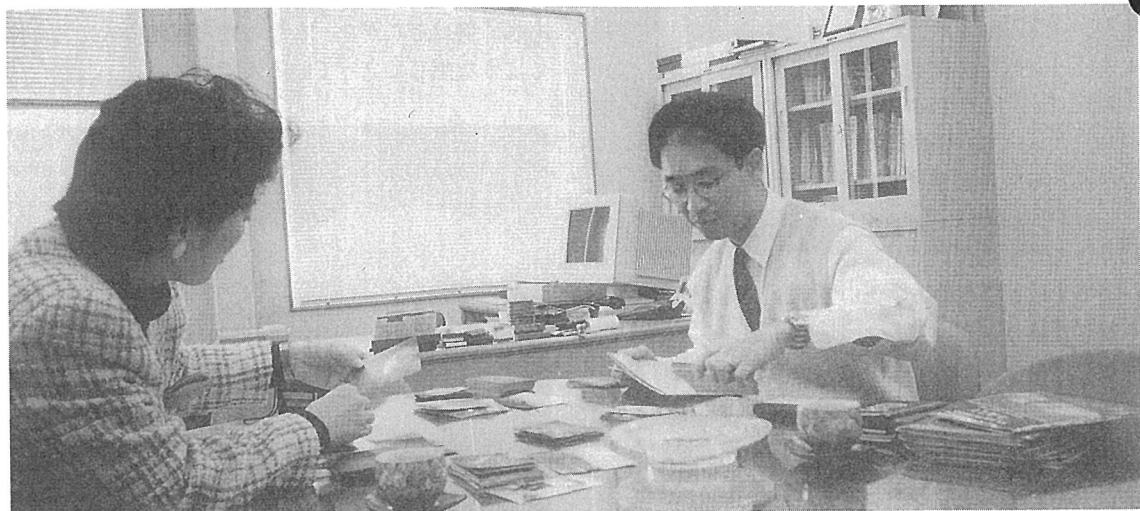
豊田『一週間くらいだったんですが、自己革新

というやつに取り組んできました。朝7時から夜9時までみっちりなんです。大きな声で松下幸之助の7つの精神を唱えるところから始まり、学生時代に戻ったかのような、起立、礼!の挨拶、3時間ごとの講義。9時に終わるといっても、それから自分なりに机に向かって、自分の中からジワっとしみ出てくる今日一日の何であるかをまとめなきゃいけないわけで、それが終わるとだいたい11時くらいになるんですよ。

でもメリハリがあって大変気持ちよかったです。講義の中で「社長の発展と会社の発展はイコールである」という話があったんですが、これには胸を打たれました。ああ。まず自分が変わらなきゃいけないんだと。』

—社長就任は平成6年4月と伺ってますが、それまではお父さまである前社長の仕事ぶりをどのようにご覧でしたか。

豊田『それなんですけどね。見てて、あれなら自分でもできるんじゃないかと思ってたんです。とんでもないことでしたね。トンチンカンな方向を見てたというか、日に日に事の重大さ、責任の重さを感じ



INTERVIEWER

花井 美紀

(株) コミュニケーションデザイン代表
イベント司会・コーディネーター、
ビジネスマナーインストラクター、
信用金庫協会女子職員講座の専任講師。
TV、ラジオ等で現在活躍中。



じまして。松下青年経営塾に入ったのも、とにかく勉強をしようという気持ちからでした。』

—若い社長さんですから、ご自分より年上の社員もたくさんいらっしゃるわけですね。

豊田『そうですね。反対に教えてもらう部分も大きいですが、若い社長なりに、私はこう思う、こうしたいということを伝えて、あとはコミュニケーションを図ることに努力しています。

そして、やらなければいけないことを確実にやっていく。これが大切ですよ。』

—うーん。大変だ(笑)。これからますますお忙しくなりそうですが、そう思うとダイビングへの郷愁みたいなものが胸の奥底から突き上げてくるようなことはありませんか？

豊田『(声のトーンが高くなって) ありますねえ。

この写真なんか見ても、わずか5、6年前なのにまったく顔が違う。実に素直に笑ってますよね。どうして今はこういうふうなんだろう。ついつい思ってしまいます。海水パンツいっちゃんの身軽さと自然さが、体にも心にもあった時代が懐かしいですね。』
—知らない人とでもすぐ友達になれた、そうした時代を思い出していただくことで、肩の力が抜けて、豊田さんなりの個性に根ざした社長業が早く確立するといいですね。すると余裕が出てきて、またダイビングに行ける(笑)。

豊田『早くそうなりたいですね(笑)。』